



猛毒生物大図鑑 全3巻

今泉忠明

2015年・ミネルヴァ書房

定価（各巻本体2,800円＋税）

評者 酪農学園大学 教授 浅川満彦

評者が専門とする寄生虫学と兄弟関係にある学問分野が病害動物学。人の健康に何等かの悪影響を及ぼす動物の分類、生態、防除などを扱う学際的な中味を含む医学系分野である。病害動物学の代表的な動物群として、ダニ類・蚊などや住家性鼠類なども含まれるので、獣医学系でも講ぜられている。しかし、いずれも病原体媒介者としての側面が強調されているので、有毒なクモ類あるいはヘビ類など直接的加害動物は扱われない。評者は札幌市内で散歩中にマムシに咬まれた犬の相談を受けたことがあるが、担当獣医師は膨れあがった犬の顔を前に途方に暮れていた。

何でもかんでも、大学で教えるのは不可能である。特に、高度化した獣医学では教える項目が増加中であるからだ。しかし、大切な家畜や愛玩動物が、危険動物により受傷するケースは想定内として、「病害動物学」の獣医学は、学部教育として準備しておくべきではないか。

このような一方で、エキゾチック・アニマルという、一部獣医学学生の間で熱狂的な人気の的になっている動物群がある。評者のゼミには、毎年、この手の学生さんが来て下さるのだが…。もちろん、エキゾチック・アニマルの獣医学も、それをきちんと教育する余裕は、大学には無い。

獣医学で蔑ろにされた「病害動物」と熱狂的指示を受けるエキゾチック・アニマルの「病害動物」。当面「エキゾのスペシャリストになるには、病害動物学の知識・経験が厳しく要求されるはず」と喚起し、心ある学生や獣医師の自己鍛錬に期待をするしかあるまい。

今回紹介する『猛毒生物大図鑑』— 想定読者層「小学校高学年～中学生」ではあっても—、その自己鍛錬の第一歩になろう。各巻は生息環境別にまとめられ、第1巻が山・森林・砂漠、第2巻が海および河川、第3巻が市街地、各巻本文の分量は巻末索引を含め39頁でまとめられている。第1巻「はじめに」で毒の定義・種類、生物毒の生態的な機能、第1章で日本と世界の猛毒生物概要、第2章で生物進化に絡めた生物毒の起源と機能、猛毒生物への対処法、治療薬法の開発など、第3章で猛毒生物の各論（哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、サソリ・クモ類および昆虫類の計25種）で構成されていた。第2巻以降も同様な章構成となるが、各論は第2章で魚類（およびウミヘビ類）のほか、腔腸動物・軟体動物が、また、第3章で節足動物のほか、植物・真菌・細菌も、それぞれ含まれていた。しかし、若干のページ数では語り尽くせないのが、ミネルヴァ書房さんは別図鑑シリーズ（全3巻）『ウイルス・細菌・真菌図鑑』および『微生物大図鑑』をそれぞれ刊行済みあるいは刊行中である（前者はJVM Vol.69 No.1で紹介）。